

西都市埋蔵文化発掘調査報告書第29集

市内遺跡発掘調査概要報告書V

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

2000

宮崎県西都市教育委員会



西都原地区遺跡 第26地点 遺構分布状況



日向国分寺跡第5次A区遺構確認状況（北東より）

序

西都市教育委員会では、国庫補助を請けて、市内遺跡発掘調査として西都原地区遺跡及び日向国分寺跡の確認調査を昨年に続き実施しました。本書は、その調査結果の概要報告書であります。

今回、西都原地区遺跡については、昨年度遺構・遺物等を確認した地点と天地返しが予定されている地点の調査を行いました。調査の結果、確認調査においては遺構・遺物等は全く検出されなかったものの、本調査においては集石遺構をはじめ、古墳周溝や掘立柱建物群跡を検出することができました。

一方、日向国分寺跡では中門跡が確定され、さらに、昨年度確認された回廊同様最低でも3回の建て替えが判明しました。また、主要伽藍配置の東側に東門、南東側に塔跡の存在も浮かび上りました。

これらの遺構等は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものであり、大きな成果をあげることができました。

本報告が専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成12年3月31日

西都市教育委員会

教育長 菊 池 彬 文

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を請けて、平成11年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 平成11年度の調査は、西都市大字三宅字西都原に所在する西都原地区遺跡内（たばこ耕作に伴う天地返し地点）、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡を対象に行った。
調査は平成11年6月1日から平成12年2月28日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については養方政幾・笠瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章は、養方政幾・笠瀬明宏、第Ⅲ章は養方政幾、第Ⅳ章は笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位はFig.1・2・7・8は平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、Fig.3・4・5・11・12は磁北である。この地点の磁北は、真北より $5^{\circ} 25'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 遺物・土層に用いた色測については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帳』に準拠した。

目 次

第I章 序説	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第II章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第III章 西都原地区遺跡の調査	
第1節 これまでの調査結果と概要	4
第2節 調査の記録	6
第3節 小結	11
第IV章 日向国分寺跡の調査	
第1節 調査区の設定と概要	13
第2節 遺構	15
第3節 遺物	18
第4節 小結	22
報告書抄録	32

挿図目次

- Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図
Fig. 2 西都原地区遺跡調査区域図(S=1/10,000)
Fig. 3 第10・11地点集石造構(S=1/40)・出土遺物(S=1/2)実測図
Fig. 4 第14地点川土遺物(S=1/2)・古墳周溝等(S=1/1,000、S=1/120)実測図
Fig. 5 第26地点遺構分布図(S=1/200)
Fig. 6 第26地点出土遺物実測図(S=1/2)
Fig. 7 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図(S=1/1,000)
Fig. 8 日向国分寺跡A区遺構実測図(S=1/80)
Fig. 9 A区P1-P2土層断面図 (A - A') S=1/40
Fig.10 A区SE001土層断面図 (B - B') S=1/40
Fig.11 B区第1トレンチ遺構実測図(S=1/100)
Fig.12 C区第1トレンチSR001遺構実測図(S=1/40)
Fig.13 日向国分寺跡第5次出土土器実測図(S=1/3)
Fig.14 日向国分寺跡第5次出土瓦実測図(S=1/3)

図版目次

卷頭 PL1. 西都原地区遺跡第26地点造構分布状況

PL2. 日向国分寺跡第5次A区造構確認状況（北東より）

PL1. -西都原地区遺跡-

1. トレンチ調査状況（第30地点）

2. トレンチ調査状況（第35地点）

3. アカホヤ火山灰下層調査状況

PL2. -西都原地区遺跡-

4. 第11地点造構（集石造構等）検出状況

5. 第10地点集石造構（6号）検出状況

6. 第10・11地点出土土器（縄文土器）

PL3. -西都原地区遺跡-

7. 第14地点出土土器（縄文土器）

8. 第14地点古墳周溝内出土遺物

9. 第14地点古墳周溝内出土遺物

PL4. -西都原地区遺跡-

10. 第26地点造構（掘立柱建物跡等）検出状況

11. 第26地点出土遺物（土器・鐵・龍・財物）

PL5. -日向国分寺跡第5次-

12. 日向国分寺跡A区造構検出状況（北東より）

13. A区SE001遺物出土状況（東より）

14. A区SE001完掘状況（東より）

15. A区P1半裁状況（東より）

16. A区SE001土層断面状況（西より）

PL6. -日向国分寺跡第5次-

17. B区第1トレンチ造構検出状況（東より）

18. B区第1トレンチ西側完掘状況（南より）

19. B区第3トレンチ造構検出状況（東より）

20. C区第1トレンチ造構検出状況（南より）

21. C区第1トレンチSR001造構検出状況（北東より）

PL7. -日向国分寺跡第5次-

22. 日向国分寺跡第5次出土土器

PL8. -日向国分寺跡第5次-

23. 日向国分寺跡第5次出土瓦

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の発掘調査については、たばこ耕作の天地返しに伴い実施したものであり、昨年度からの継続である。このことについては、天地返しが地下遺構に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることから、たばこ耕作組合と協議を重ねてきたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であると判断し、重要な遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議をすることを条件に本年度も調査を実施することになった。

調査は、昨年度に遺構・遺物等を確認した西都原台地北側地域の第10・11地点、第14地点、第26地点の4地点の本調査と、新たに天地返しが行われる予定になっている8地点（第30～37地点）の確認調査であり、調査期間としては、たばこの準備及び耕作物との関係で8月～12月までの間で調整しながら進めることになった。

一方、日向国分寺跡の調査は過去3回行われてきた。まず、昭和23（1948）年に駒井和愛教授を団長とし、主として早稲田大学で組織された日向考古調査團によって行われた。その後、昭和36（1961）年及び平成元年度には県教育委員会によって発掘調査が実施されたが、僧坊跡（平成元年度）と推定される遺構以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。さらに、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化が著しく、畑地や空き地の確保も困難となり、伽藍配置の確認が急務であることから、平成7年度より西都市教育委員会によって、主要伽藍配置等の確認調査を実施してきた。本年度もこの継続として調査を行った。

第2節 調査の体制

調査主体

教 育 長	菊 池 彰 文
社会教育課長	阿 万 定 治
同 文化財主事	日 高 憲 一
同 文化財主事	土 持 留 理

調 査 員	同 文化財係長	義 方 政 幾
	同 文化財主事	笠 瀬 明 宏

調査指導員	日 高 正 晴	（西都原古墳研究所長）
	小 田 富士雄	（福岡大学人文学部教授）
	柳 沢 一 男	（宮崎大学教育学部教授）

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50～80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡式形態の前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在し、また、南九州獨白の埋葬形態を有する地下式横穴墓も12基確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で、その南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。

西都原地区遺跡は、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼び名で、いずれも西都原台地上に位置している。原口遺跡は台地南側周辺、寺原遺跡は原口遺跡の北側（寺原集落の東側周辺）に位置し、丸山遺跡は台地北側周辺、西都原遺跡は台地ほぼ中央部の東側周辺に位置している。これら遺跡内からは丸山遺跡（平成元年度）で縄文時代早期の焼縄群、原口第2遺跡（平成2年度）からは古墳時代後期の堅穴式住居跡2軒、寺原第1・4遺跡（昭和58・59年度）からは弥生時代終末の堅穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭の堅穴式住居跡20軒が検出されている。

日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間台地に位置し、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷地形に囲まれている。また、北方600m程の妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は歴史的にも価値のある重要な地域となっている。また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、日向国分寺跡から直線で1.2kmの寺崎・法元地区に、県教育委員会の調査により痕跡が確定された。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は、古代日向国の中心的な役割を果たしてきた歴史的な環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺跡」『日向遺跡総合調査報告』第3輯 1963
- (3) " " 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1963
- (4) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (5) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (6) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書II」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (7) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書III」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (8) " " 「市内遺跡発掘調査概要報告書IV」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999



- | | |
|-----------------------------------|-------------------|
| 1. 西都原古墳群 | 2. 御陵墓（男狹穗塚・女狹穗塚） |
| 3. 丸山遺跡・4. 西都原遺跡・5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡） | |
| 6. 新立遺跡 | 7. 原口第2遺跡 |
| 9. 日向国分尼寺跡 | 10. 酒元遺跡 |
| 11. 寺崎遺跡 | |

Fig.1 西都原古墳群周辺位置図

第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査

第1節 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに、圃場整備をはじめ道路拡幅等に伴う発掘調査が行われているが、なかでも、平成5年度から平成7年度まで実施された圃場整備に伴う発掘調査は、調査面積が90,000m²にも及ぶ大規模的なもので、道路及び削平によって地下遺構の保存が困難な部分について行われた。

この調査では、縄文時代早期の集石遺構及び焼窯群をはじめ、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代前期の竪穴式住居跡群、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓などが検出された。位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部であり、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡などが検出されているものの、密度的にはかなり低いことが判明している。また、古墳の築造に関連した人々の遺構が確認されなかったことから、台地上は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。なお、横穴墓については、現在、県教育委員会が主体となって進められている「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)のなかで保存・活用されることとなり、酒元ノ上横穴墓群保存覆屋として横穴墓群の構造が見える施設の建設が行われている。

このような中、本年度については、昨年度の確認調査によって遺構・遺物等が検出された西都原台地北端部の第10・11地点、そして、県立西都原資料館の東側の第14地点及び第26地点の本調査を行った。また、本調査と並行して、天地返しが予定されている陵墓の西側及南側の圃場整備された畑地の確認（トレーニング）調査を行った。

確認調査は、アカホヤ火山灰層を中心に行ったが、アカホヤ火山灰層の遺存率は昨年同様、全体の5割程度であり、かなり削平されている地域が多かった。調査地点は、8地点（第30地点～37地点）で、調査対象区域の面積も約57,000m²と広範囲で苦慮したが、幅2mのトレーニングを8～10m間隔に設定して遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。

アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレーニング内に幅2m・長さ2m程の小トレーニングを設定して確認を行った。

調査の結果、確認調査では、いずれの地点においても遺構・遺物等を検出することができなかつた。

本調査では、第10・11地点及び第14地点から縄文時代早期の集石遺構や焼窯群、また、第14地点南端からは古墳時代後期の古墳周溝を検出することができた。さらに、第26地点からは16世紀頃の掘立柱建物跡群を検出するなど大きな成果を上げることができた。

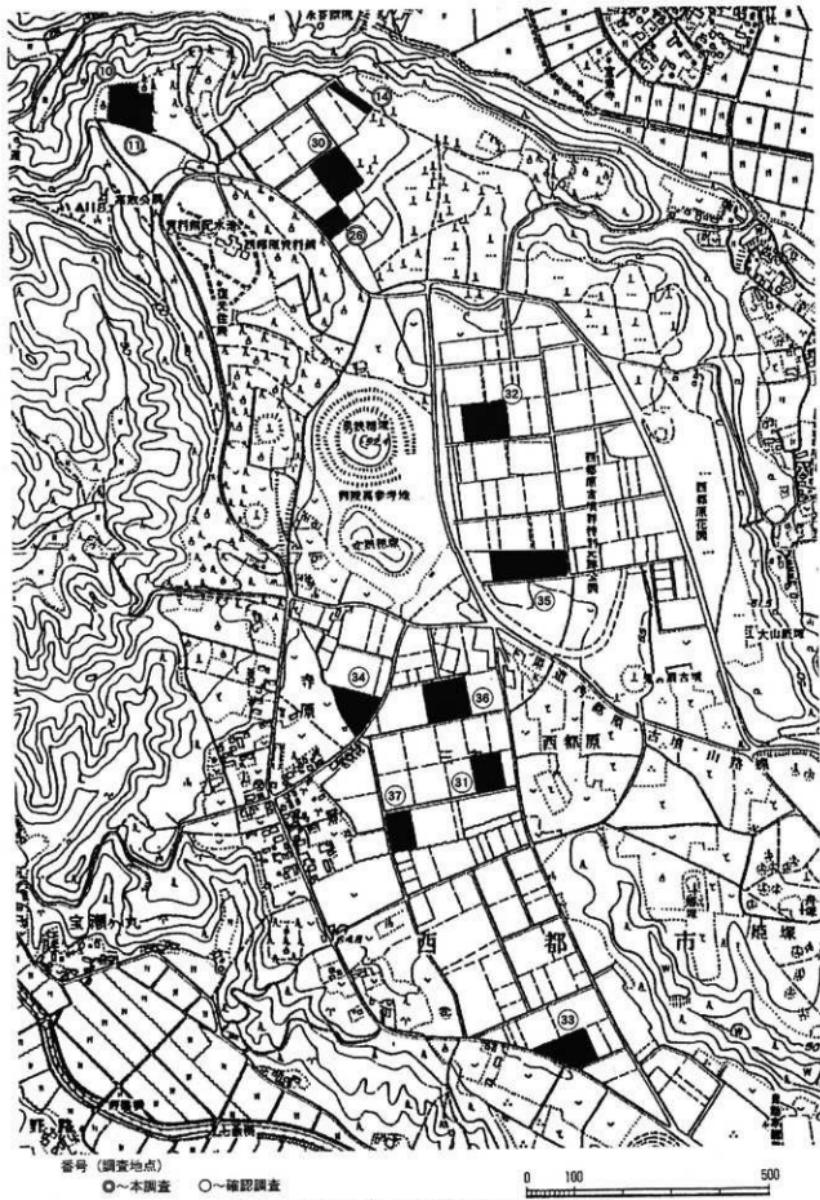


Fig.2 西都原地区遺跡調査区域図 ($S=1/10,000$)

第2節 調査の記録

1. 本調査（第10・11・14・26地点）

(1). 第10・11地点

第10・11地点は、西都原台地の北端部で、西都原資料館の北側に位置し、昨年度の確認調査で焼穢群を検出した地域である。

調査の結果、造構として集石造構10基を検出した。いずれも、掘込みを有するタイプのものであるが、掘込みの浅いものも含まれている。掘込み内の礫も密に集積されているものとないものがあり、また、床底面に大きな礫を有しているものと有していないものがあり様々である。規模的には、径1.00～1.75m、深さ0.25～0.57m、個別的には、最大のものは第10地点のS I 6で、径1.60m・深さ0.62mを計る。礫は角礫が多く、火を受け赤く変色している。Fig 3には、10基の中から2基を抽出して掲載している。

S I 5及びS I 6は、U状の掘込みを有し、床底面の中央に平たい大きな礫を置き、その周囲に20cm前後の礫を花弁状に配するタイプのものである。礫は密に集積している。S I 6は径1.75m・深さ0.50m、S I 6は径1.75m・深さ0.57mを計る最大規模のものである。

遺物は、押型文土器（Fig 3 1～4）が主体で、籠描きによる綾杉文（Fig 3 7）や横位の刻線とを組み合わせた（Fig 3 6）ものなどが含まれている。押型文土器には、橢円押型文と山形押型文があり、内面には原体条痕が施されているものが含まれている。土器の特徴から、早水台式からヤトコロ式に並行した時期のものと考察される。

その他、石器として、砂岩製のすり石やチャート及び黒曜石製の石鎌などが各地点から出土している。

(2). 第14地点

第14地点は、西都原資料館東側の北東部にあたる地点に位置し、第10・11地点同様昨年度の確認調査で焼穢群を検出した地域である。

調査の結果、アカホヤ火山灰上層にて古墳周溝（Fig 4）、アカホヤ火山灰下層にて焼穢群を検出したが、焼穢群に関連した集石造構や竪穴式住居跡を確認するには至らなかった。このことは、調査区域が小範囲に限られていたこともあるが、いずれにしても、遺物が多く出土しており、集石造構等も含めた集落跡の存在が想定される。

遺物は、口縁部に貝殻腹縁による連続刺突が施された前平式土器（Fig 4 1・2）をはじめとする貝殻条痕文系土器（Fig 4 3～6）が主体を成しており、わずかに押型文土器が含まれている。

周溝は、北西部分にあたるところの、全体の1/4程を検出した。幅0.95～1.33m、深さ0.53～0.75mで、復元すると径約1.2m（周溝を含めると径約1.4m）の円墳になる。共伴遺物として、周溝内から須恵器の蓋形土器や壺形土器（PL 4）をはじめ高杯などの土師器（PL 4）などが出

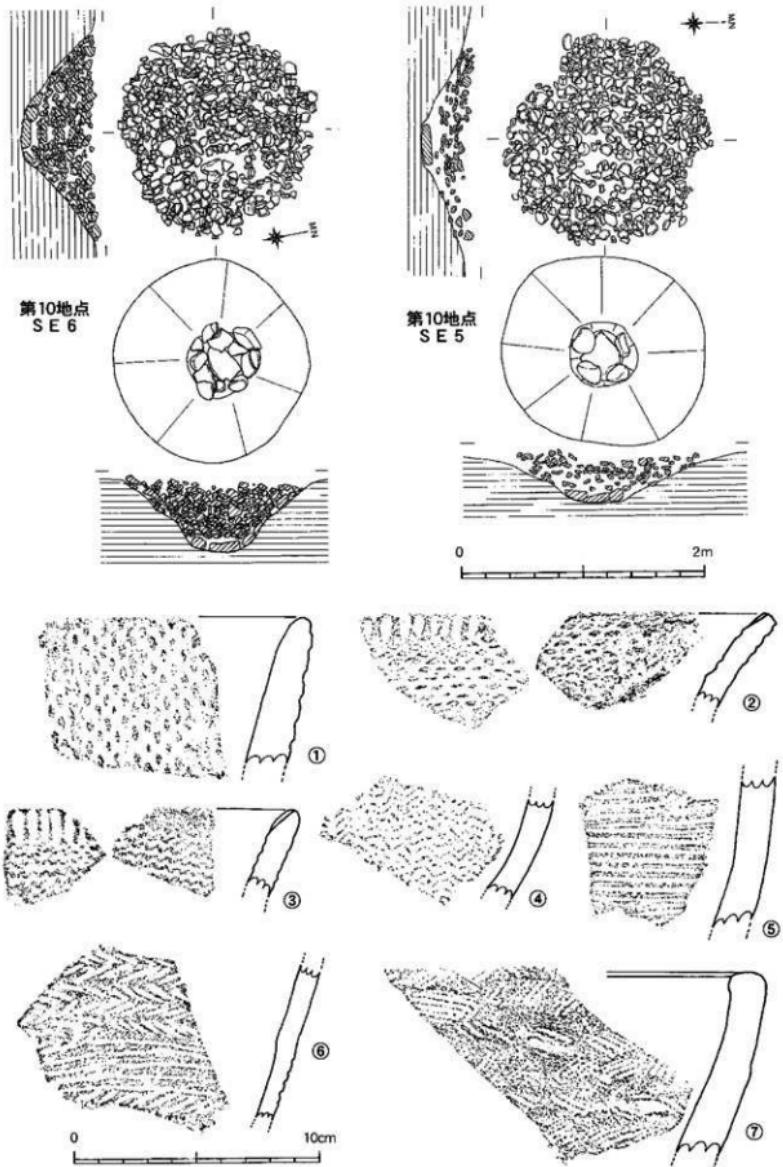


Fig.3 第10・11地点 集石遺構(S=1/40)・出土遺物(S=1/2)実測図

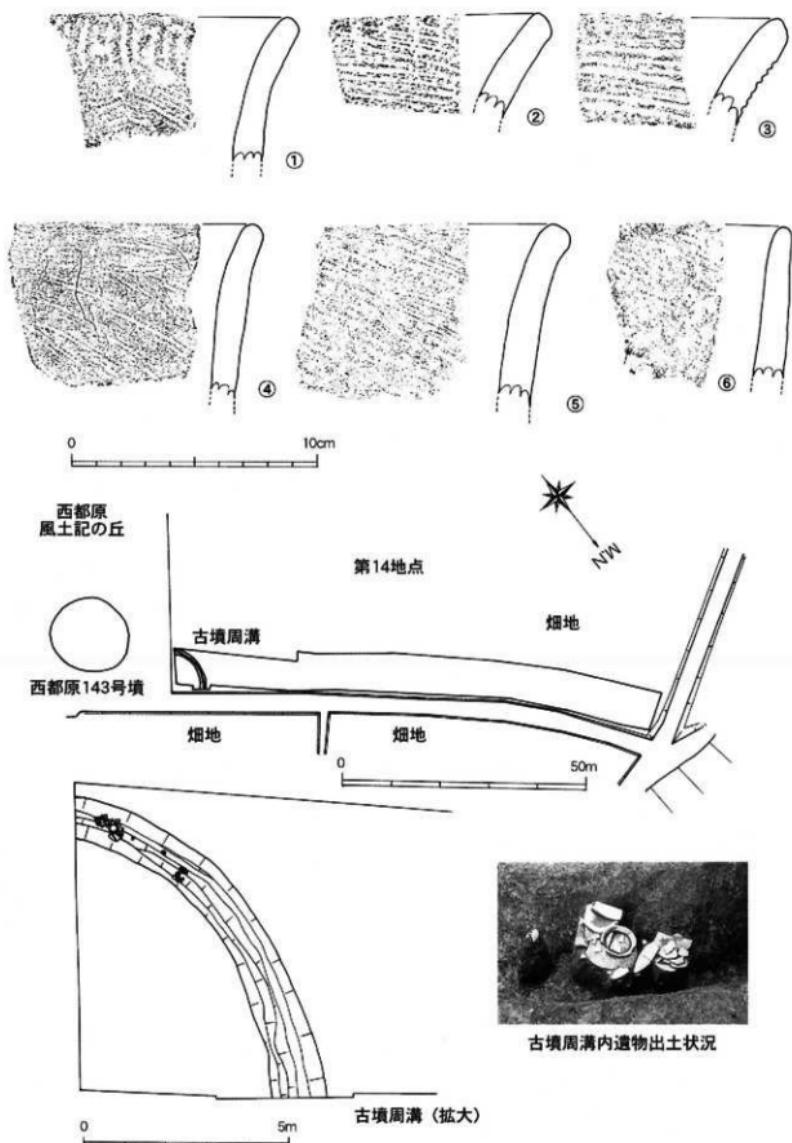


Fig.4 第14地点 出土遺物($S = 1/2$)・古墳周溝等($S = 1/1,000, 1/120$)実測図

ナしている。

なお、第14地点は、西都原古墳群（西都原風土記の丘）に隣接した畠地であり、検出した周溝の15m程南には西都原第143号墳（円墳）が位置し、さらに、その南側一帯には多くの円墳が分布している。

(3). 第26地点

第26地点は、第14地点の南西230m程に位置し、昨年度の確認調査でピットや溝状遺構などを検出した地域である。

調査の結果、掘立柱建物跡をはじめ土壙墓及び土坑や溝状遺構・ピット群などを検出した。

掘立柱建物跡（Fig.5）は9棟検出しているが、いずれも南北棟である。1軒×3軒（SB6～9）と1軒×4軒のもの（SB3～5）が多く、その他、1軒×5軒（SB1）のものと2軒×2軒のもの（SB4）が含まれている。

規模的には様々で、最小のものはSB4で、床面積約14.8m²を計り、最大のものはSB1で、床面積約50.0m²を計る。

これらの掘立柱建物跡は、調査地の西側に集中して確認しているが、いずれの柱穴も重複しておらず、また、遺物もほとんど出土していないことから、前後関係を把握することはできなかったが、16世紀前後のものと推定される。

土壙墓（Fig.5）SD1は南側中央部から検出したもので、いくつかの土坑等と重複しており、遺構面ははっきりしないが、長軸約2.50m、短軸約1.50mの長方形状のものと推定される。西側には10～30cm前後の礫が4～5段一列に積み上げられており、青磁盤（Fig.6③）や白磁碗（Fig.6⑥）、そして、吉祥字が入った染付皿（Fig.6⑦・⑧）が2枚重ねて埋葬されていた。これら共伴遺物等から、時期的には16世紀前後のものと推定される。

その他、土坑のなかには獸骨が埋葬されているものが2基含まれており、溝状遺構については、昔時に畠地の境界にあったもので、排水溝として使用していたものと推察される。規模的には、SC1が長軸1.65×短軸0.78m、SC2が長軸1.10×短軸0.70mを計り、楕円形状のプランを呈している。

遺物として、ピットから青磁（Fig.6④・⑤）をはじめ白磁・染付などが出土している。

2. 確認調査（第30～37地点）

本年度も昨年同様に重機により、たばこ耕作に伴う天地返しが予定されている西都原台地北部で西都原資料館の東側一帯（丸山遺跡）、そして、西都原台地中央部で男狹穂塚・女狹穂塚占墳の東側（西都原遺跡）及び南側（寺原遺跡）一帯の調査を行ったが、いずれの地点においても遺構・遺物を確認するには至らなかった。

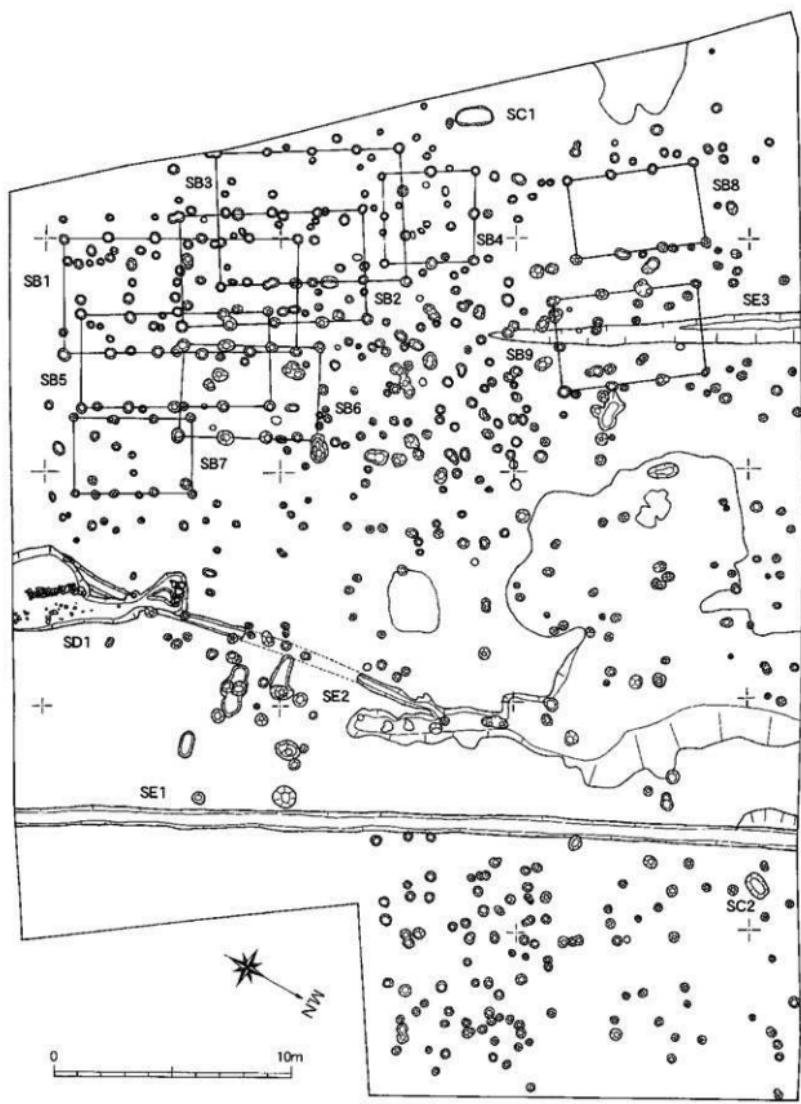


Fig.5 第26地点 遺構分布図 ($S = 1/200$)

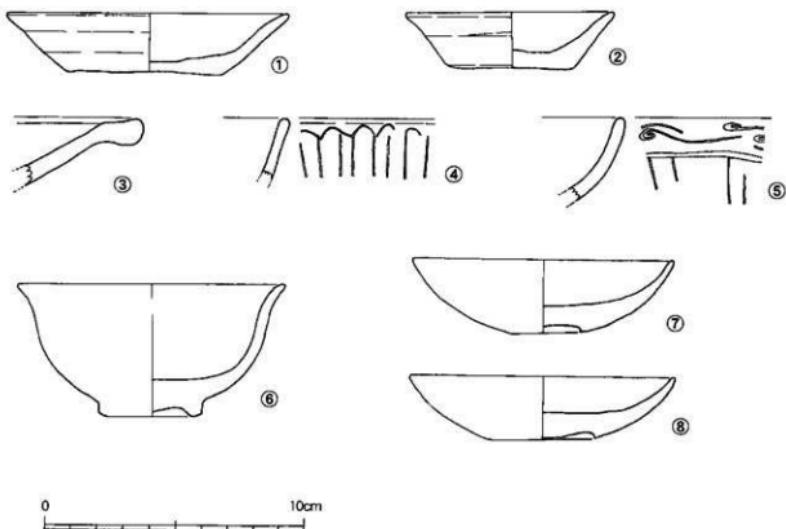


Fig.6 第26地点 出土遺物実測図(S=1/2)

第3節 小 結

西都原台地では、これまでに、童子丸（新立遺跡[◎]）墓地造成に伴う発掘調査をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模的な発掘調査（西都原地区遺跡[◎]）や昨年度たばこ耕作の天地返しに伴い実施した確認調査（西都原地区遺跡）によって、様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石造構や古墳時代初頭頃の堅穴式住居跡、西都原地区遺跡では縄文時代早期の集石造構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初め頃の堅穴式住居跡や横穴墓群、さらには、古墳時代以降中世までの掘立柱建物跡を検出した。

また、圃場整備に伴う調査では低丘陵地に横穴墓が検出された。この横穴墓は、西都原台地上に偏在する地下式横穴墓の特徴を併せ持っていることで、地下式横穴墓と横穴墓の折衷形という墓制を考えるうえでは非常に貴重な遺構として注目された。さらに、この調査において、古墳を築造した人々の居住に関連した遺構がほとんど検出されていないことから、古墳の築造と居住空間の移動とが、何らかの形で関わっているのではないかと推測した。それは、古墳築造には相当の人々が携わっていたはずであり、弥生時代の住居跡は検出されているのだから、古墳時代に至っても、そのまま居住空間として利用してもいいはずであり、それが自然の流れであることという考えに起因している。このことについては、今回の調査でも証明されたが、謎の多い西都原古墳群の謎を解く重要な鍵であり、慎重な検討が必要である。

今回の調査で興味があるのは、第10・11地点では押型文上器系、第14地点では貝殻条痕文土器系

の土器が主体を成していることで、極めて隣接した地域でありながら、異なる形式の土器を保有していることである。このことは、生活する文化の違いを示しているものと思われるが、本地点からは芳ヶ迫第1遺跡（田野町）などから出土している土器に類似したものもあり、他地域との比較も含めて、今後も検討しなければならない課題である。

第26地点では、掘立柱建物跡群をはじめ多くの柱穴や土坑などを検出した。なかでも、掘立柱建物跡群は、16世紀頃のものと推定されるもので、西側一帯から確認されるものだけで9棟検出している。遺物等があまり出土せず、重複もほとんどしていないことから、前後関係を把握することはできなく残念であるが、市内においてこれだけまとまって検出された例は少なく、建物の規模・構造等を知る上では貴重な資料である。

また、第26地点からは、青磁盤や白磁碗などをはじめとする輸入陶磁器が出土しており注目される。さらに、吉祥字の入った染付皿なども出土しているが、これらは穂北城跡（西都市）から出土しているものと類似している。穂北城跡は、中世期に日向一円の48城を支配した伊東氏（都於郡城跡）の文城であり、この時期、都於郡10代城主の伊東三位入道義祐の全盛期に相当する時代で、特に、南方貿易に尽力した結果、貴重な中国陶磁器が流入したものと推察されており、このような観点・関連性からも注目されるものである。

このように、各時代に応じて様々な様相を呈し、文化を持つ西都原、これまでの調査によって、少しずつ解明されてきてはいるものの、まだ未解明な部分が多いのが現状であり、来年度以降実施される確認調査等によって、さらに検討を加え解明していくかなければならないと思われる。

註

- ①. 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- ②. 西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- ③. 田野町教育委員会「芳ヶ迫第1遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集 1986
- ④. 宮崎県教育委員会「穂北城跡」『県道杉安・高鍋線道路改良工事関係発掘調査報告書』 1992
西都市教育委員会「三納城跡・穂北城跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第24集 1996
- ⑤. 西都市教育委員会「都於郡城址本丸跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集 1988
のなかで日高正晴氏が推察されている。

第IV章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については、前記のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地點については、資料不足のために明示できないが、昭和36年分については、旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度については寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。

昭和23年及び昭和36年の調査では、伽藍配置などについては明確にされていないが、平成元年度の県教育委員会による調査では僧房跡と推定される掘立柱建物跡などが検出された。

西都市教育委員会による日向国分寺跡の調査は、平成7年度から実施している。7年度の調査では金堂のものと推定される掘込事業跡や回廊跡（並行したピット列）、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状造構が検出されている。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する造構で、今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部を特定することができた。

平成8年度は、この調査結果を踏まえ、7年度検出した造構の確定及び溝状造構の範囲を確認するための調査を実施した。調査の結果、直行した溝状造構とそれに並行したピット列が検出された。ピットは溝に並行してほぼ等間隔に並んでおり回廊のものであること、また、II地点第1・3トレチの溝状造構は、他トレチ同様回廊の外側に巡らされていたものと推定された。このことによって、溝状造構の東辺が確定されるなど大きな成果をあげている。

平成9年度は、これらの調査結果を踏まえて、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の造構等の有無確認についてという目的をもとに調査を行った。調査の結果、A区から片側3本ずつ計5本の柱穴が検出され、西向き6本柱の主要伽藍西側に位置する西門が確認できた。また、西門北側からは南北にのびる溝状造構（SE002）が検出され、主要伽藍を取り巻くように溝状造構が巡っていることが確認できた。

平成10年度の調査は、西門から南北に延びる溝状造構がどこまで延びるのか、また、主要伽藍配置南東側の平成7・8年度に調査を行った回廊跡（推定）を確定させるという目的のもとに行った。調査の結果、A区で以前確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3回の建て替えが行われていることが判明した。また、主要伽藍南側の東西幅が84mと判明した。D・E区からは溝状造構が確認せず、主要伽藍を巡る溝状造構がこの箇所までは延びていないことも判明した。

本年度の調査は、平成10年度確認した回廊が取付く中門跡と、平成9年度に確認された主要伽藍に取付く西門に相対する東門跡、そして塔跡の確認を目的とし行った。調査の結果、平成7年度にトレチ調査を行ったA区を一辺10m程に拡大し、中門跡の東側半分を検出した。中門は回廊同様に最低3回の建て替えが行われており、建て替えの度に規模が拡大していることが判明した。B区で塔跡は確認できなかったが、かなり深い段落ちと溝が確認され、国分寺跡と何等かの関係がある造構であろうことが予想できた。C区で東門は確認できなかったが、回廊に沿って巡る溝状造構が東門の想定箇所でとぎれていたことから、その内側に所在する可能性が高くなった。

※(註)は第II章参照

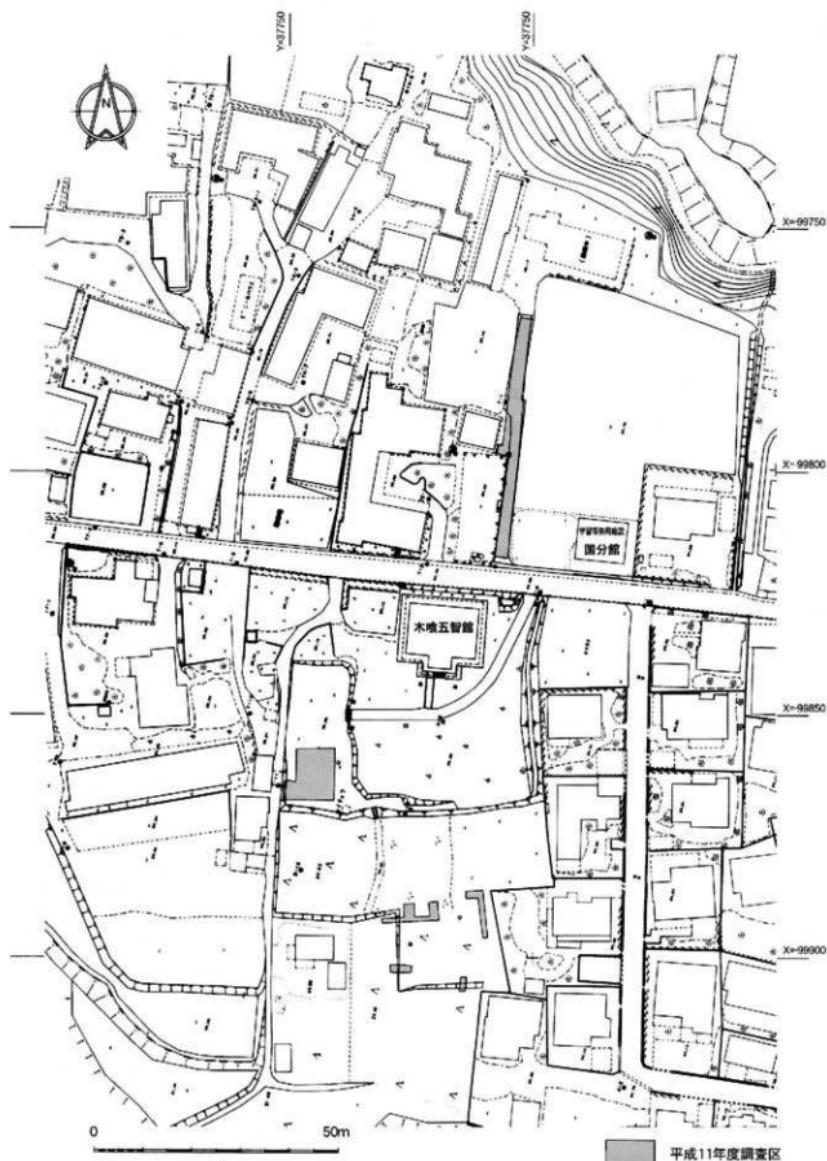


Fig.7 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図(S = 1/1,000)

第2節 遺構

《A区の遺構》

A区は平成7年度にトレンチ調査を行い溝状遺構と並行したピット列が確認されていた。このピット列の解明、また、この地点に以前から中門跡が想定されてきたため、その検出を目的に確認調査を行った。調査区の規模は、一辺10m程度のものであるが、電柱の支柱や樹木の為、逆L字形のような形で設定した (Fig.7・8参照)。

調査の結果、30~130cm程度の円形の柱壠形と調査区南東側に溝状遺構が確認された。昨年度の調査では、この調査区の東側に回廊跡が確認されている。回廊と今回検出された中門を座標にのせて繋ぐと回廊と中門までの柱間が一致し、中門跡も最低3回の建て替えが行われていることが確認できた。

第1期目の中門は奥行3.0mであり、昨年度検出した回廊の梁行と一致する。つまり、回廊建立当時の中門は回廊を一部切ったようなものであったのであろう。しかし、第2期目になると中門の規模は南北方向に拡大し、奥行が4.8mとなる。さらに、第3期目になると東西方向にも拡大し、2×3間の中門を想定した場合、中門の東西幅が9mになる。また、第1・2期目柱壠形内の柱穴には白色粘土が充填されており、回廊同様掘立柱建物であることが予想されたが、第3期日の柱壠形にはそのような痕跡はなく、柱壠形上部には川原石が円形に配されて遺存していた。柱壠形を半裁したところ、柱壠形内にも川原石や瓦片が混入されていた。このようなことから、第3期目の中門は礎石建物と推定した。現在、日向国分寺跡周辺には、伝塔心礎や礎石とされる自然石がみられ、近年まで建立されていた祠の基礎には同様のものが使用されている。したがって、それら自然石を礎石としていたのであろうと思われる。中門も回廊同様に建て替えが行われる度に規模が拡大したため、中門の重量を支えるには礎石建物でなくてはならなかったのであろう。

また、今回南東側に溝状遺構が確認された。この溝状遺構は主要伽藍部を巡るもので、一昨年度確認された主要伽藍横の西門の前でとぎれていたため、中門の前でもとぎれることが予想されていた。検出された溝状遺構は、やはり中門の手前とぎれ、一段深く、先太りになっていた。したがって、中門の参道は、掘削しないまま掘り残してブッリジを形成していたことが明らかになった。

《B区の遺構》

B区は主要伽藍南東側の杉林に設定した。以前から塔跡が想定されてきたが、昭和36年の調査で付近を調査された以外には、今まで調査されることとはなかった。主要伽藍南東側の杉林内には、一辺15m程の四角い段があり、その上段と下段にかけて4本のトレンチを設定した (Fig.7参照)。

調査の結果、第1トレンチに何等かの建物の基壇らしき段差が確認された (Fig.11参照)。ピットは小振りであるがかなり検出され、土器片や瓦片もかなり出土した。これらピットはその段の法面にも掘削されており、その北側に何等かの建物を想定すると建物建設時の足場穴とも考えられるが、調査区がかなり狭い為、今後の調査結果に期待したい。

第2トレンチでは表土から2m程の深さの溝状遺構が確認された。ここからは瓦片の他、土器器皿や埴なども出土しており、国分寺建立時の溝である。したがって、国分寺建立時の地割溝と思われるが第1トレンチ同様、調査区がかなり狭い為今後の調査に委ねたい。第3・4トレンチからは何等遺構・遺物も検出できなかった。現在遺存する方形の段差は、全体としては定かではないが、南側に関しては、後世にかなり造成などが行われている可能性も想起できた。



Fig.8 日向国分寺跡A区遺構実測図 (S = 1/80)

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 植土 2/SYR4/2 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり 葦茎・川原石混じ 2. 2/SYR3/3 構造物ややあり しまりややあり 布やかな瓦片を含む 3. 2/SYR3/2 構造物ややあり しまりややあり 布やかな瓦片を含む 4. 2/SYR4/2 構造物ややあり しまりややあり 布やかな瓦片を含む 5. 7/SYR2/1 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり 布やかな瓦片を含む 6. 7/SYR1/1 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり アカオヤの根元込みがみらるる | <ol style="list-style-type: none"> 1. 植土 10YR2/2 構造物多くあり、植生ややあり しまりなし 2. 10YR4/3 構造物多くあり、植生ややあり しまりあり 瓦片を含む (白色粘土が大半) 3. 10YR2/1 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり 瓦片を含む 4. 10YR4/2 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり 瓦片を含む 5. 10YR2/3 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり 瓦片を含む 6. 10YR4/3 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり (白色粘土が大半) 7. 7/5YR2/1 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり しまりありなし 8. 10YR4/2 構造物多くあり、植生ややあり しまりややあり しまりありなし 9. 10YR2/3 構造物ややあり しまりややあり しまりややあり アカオヤ・白色粘土の流れ込みがみられる 10. 10YR1/7/1 構造物あり しまりややあり |
|--|---|

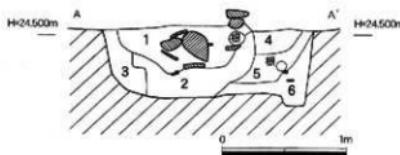


Fig.9 A区 P1-P2土層断面図(A-A') S = 1/40

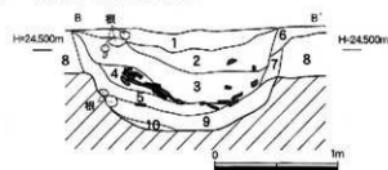


Fig.10 A区 SE001土層断面図(B-B') S = 1/40

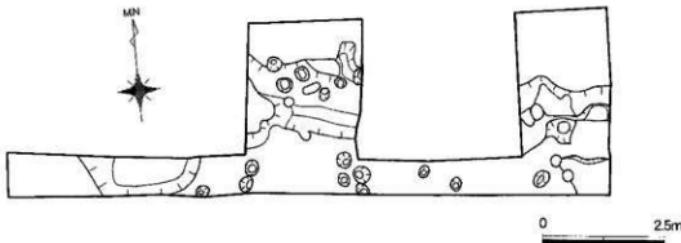


Fig.11 B区 第1トレンチ遺構実測図(S = 1/100)

《C区の遺構》

C区は平成7・8年度及び昨年度確認された東側の回廊外側の溝状遺構が宅地に入る舗装道路の下に延びることが予想されていたため、この溝状遺構の追認及び回廊のピット列、主要伽藍東側の門の確認などを目的とし調査を行った (Fig.7参照)。

調査の結果、溝状遺構は現在の地境になっているお茶の樹の下に確認された。かなり深さは浅く、この辺は当時から比べるとかなり上部を削平されているようである。溝状遺構事態もかなり粗い布堀りで掘削されていた。この溝状遺構は、西側の溝状遺構同様に北側でとぎれていた。この箇所では、規模が大きくなり深さも深く、水抜き穴として利用された可能性もある。また、一昨年度確認されていた主要伽藍に取付西門を推定中軸線で折り返した地点に溝状遺構がとぎれる箇所が検出され、この内側に東門の存在が予想できた。これに関しては来年度調査を行う予定である。また、この調査区の南端からかなり多くの瓦片や川原石が検出された (Fig.12参照)。これら遺物の中には小面積にしては多くの軒丸瓦の破損したものが含まれている。この地点は、推定金堂跡にも近く、平成8年度の調査でも、この西側からもかなりの瓦片が出土しているため、瓦淵 (SR001) である可能性は高いと思われる。

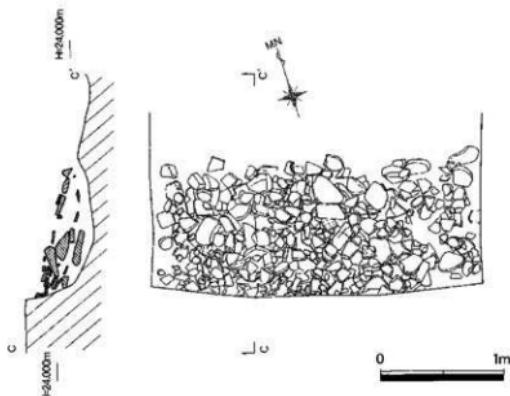


Fig.12 C区 第1トレンチSR001遺構実測図(S = 1/40)

第3節 遺物

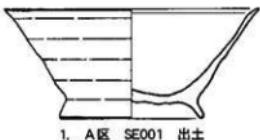
○土器 (Fig.13参照)

1は土師器の高台付塊である。胸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部先端で若干外反する。外面はヘラ削り後回転ナデで仕上げられている。内面は回転ナデ、高台部は内外面とも回転ナデである。2は土師皿である。口縁部から5mm下に、幅1mmの沈線が施されている。外面は回転ヘラ削り後、回転ナデ調整であるがヘラ削りが深かった為、ナデ調整後もかなり凹凸がはっきりしている。内面は回転ナデ調整、底部は指オサエが先に施されている。底部外面はヘラ切り時の残った粘土が胸部に張り出し遺存している。3は上師塊である。胸部は丸みをもしながら立ち上がり、口縁部端より約1cm下から外反する。外面はヘラ削り後に回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整である。底部はヘラ切り後、端部をナデ調整してある。4は土師塊である。外面は回転ナデ調整のみで直線的に立ち上がる。内面も回転ナデ調整、底部内面は指オサエが先に施されている。底部外面は焼成時のススが胸部外面に付着している。5は土師塊である。外面はヘラ削り後、回転ナデ調整である。内面は回転ナデ調整で、底部は指オサエが先に施されている。6は上師皿である。外面はヘラ削り後、回転ナデ調整である。内面は回転ナデ調整で、指オサエが先に施されている。底部端から5mm上に幅3mm程の沈線を施す。7は須恵器甕である。頸部から1.5cm下あたりの外面に格子目叩きが施されている。その上部は回転ナデ調整である。口縁部端は弱いT字形になり、下部は外方向に尖る。内面は半径3cm程の当て具痕を残すが、かなり浅い。8は土師器の高台付塊である。胸部は口縁部端から3cm下まではやや内側に丸まるが、そこから上部は外反しながら立ち上がる。外面はヘラ削り後、回転ナデ調整である。内面も胸部に若干のヘラ削り痕を残すが、その後回転ナデで仕上げられている。底部内面には回転ナデ調整前の指オサエ痕も若干遺存している。

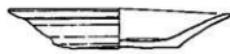
9は須恵器甕である。口縁部は短く直線的に立ち上がり、端部は外側に摘要出してある。外面は回転ナデ調整であり、頸部から下は灰被りである。内面は口縁部端から4.1cm下から指オサエがあるが、その上部は回転ナデ調整である。

○瓦 (Fig.14参照)

1は单弁11葉の軒丸瓦である。今回の調査まで瓦当部が全て遺存しているものは検出されておらず、初めて出土した。内区中房に1+4の蓮子がある。丸瓦部との接合は外区界線と周縁部の中央辺りで行う。丸瓦部には縦ないし斜めの繩ダタキ痕が遺存するが指ナデで擦り消されている。接合部内面は粘土が充填され、しっかりとナデ付けてある。2は单弁8葉の軒丸瓦と思われる。周縁・丸瓦部は遺存しないが、单弁4葉と蓮子1+2+4を遺存している。丸瓦との接合は瓦当部内面の中央部からしっかりナデ上げて行っている。3は单弁12葉の軒丸瓦と思われる。周縁と丸瓦部は遺存しない。中房内に蓮子を1個遺存している。内面の接合部は瓦当部中央からナデ上げられ丸瓦部に近付くと、その曲面に沿ってナデである。4は单弁8葉の軒丸瓦である。間弁が各弁間に配されている。内区中房内には蓮子が3個剥離した痕跡が遺存し、蓮子間にも間弁が配されている。丸瓦との接合は外区の界線より外側で行われる。5は单弁11葉の軒丸瓦と思われる。内区中房に蓮子が2個剥離した痕跡が遺存する。6は均整唐草文の軒平瓦である。内区に珠文を3個遺存する。頸部は曲線頭に移る寸前の段頸であり、内区界線よりやや内側で平瓦部と接合される。平瓦部外面には縦繩ダタキが遺存しているが頸部は丁寧に面取りが行われており遺存しない。内面には布目痕が遺存している。7は均整唐草文の軒平瓦である。内外区の境がなく、唐草文の子葉と珠文が混同し、退化傾向が認められる。



1. A区 SE001 出土



2. A区 SE001 出土



3. B区 第1トレンチ出土



4. B区 第3トレンチ出土

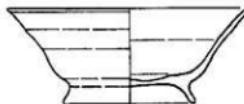


5. B区 第3トレンチ出土

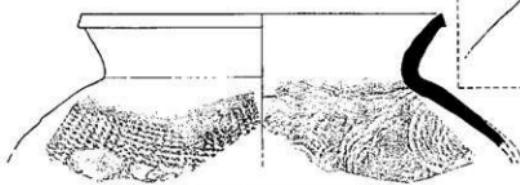


6. B区 第1トレンチ出土

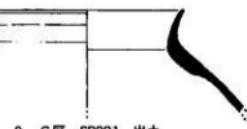
0 15cm



8. C区 SE003 出土



7. B区 第1トレンチ出土



9. C区 SR001 出土

Fig.13 日向国分寺跡第5次出土土器実測図(S=1/3)

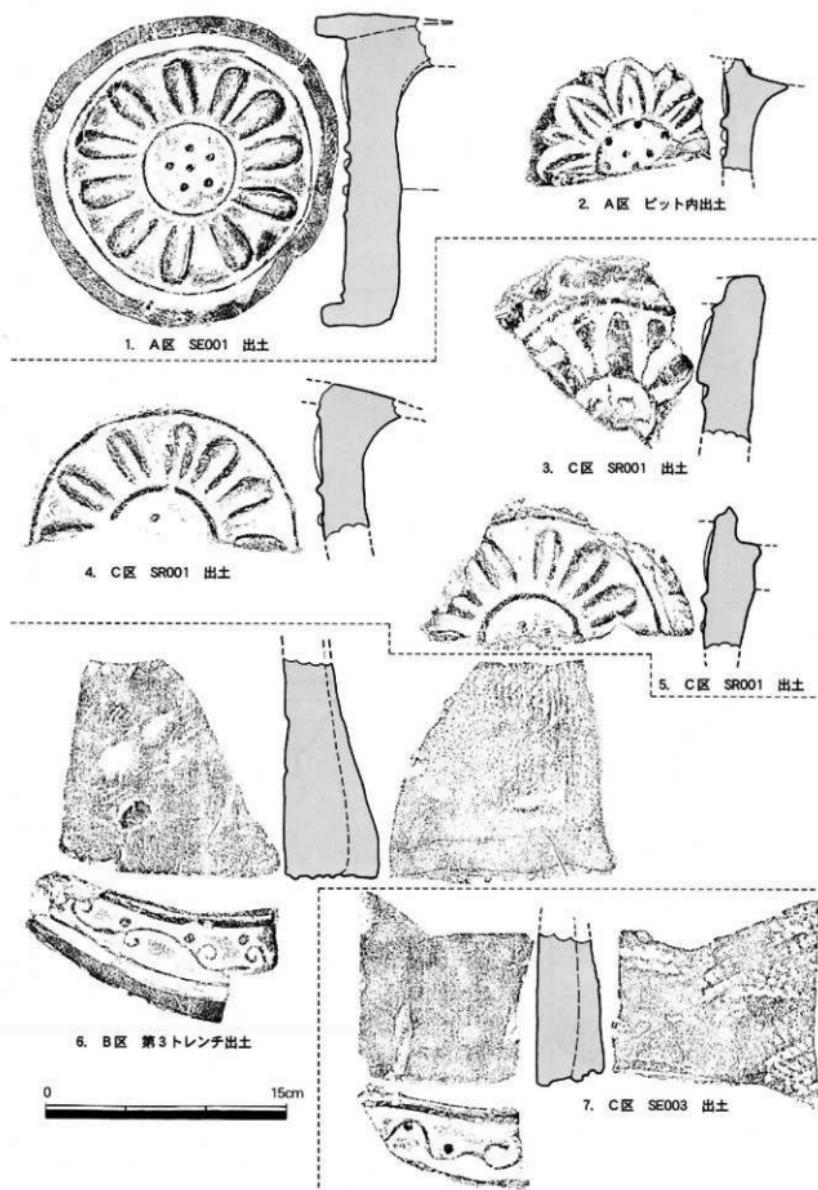


Fig.14 日向国分寺跡第5次出土瓦実測図(S=1/3)

Tab.1 出土土器観察表

No.	器種	口径	底部径	器高	保存部位	残存率	焼成	色調			胎土
								外	中	内	
1	高台付碗	16.0復	9.0	6.9	口縁部～底部	3/5程度	良好	7.5YR8/4		7.5YR8/6	1～2mm程度の石英・長石等を多量に含む
2	土師皿	13.8	6.5	2.5	口縁部～底部	6/7程度	やや良	7.5YR8/6		7.5YR8/6	1～5mm程度の長石・赤チャートを含む
3	土師碗	13.1	6.5	4.0	口縁部～底部	5/6程度	やや良	7.5YR8/4		5YR8/4	1mm程度の長石を含む
4	土師壺	12.9	6.7	5.0	口縁部～底部	4/5程度	良好	7.5YR8/8		5YR6/8	1mm程度の長石を含む
5	土師壺	13.4	6.8	4.5	口縁部～底部	5/6程度	やや良	5YR7/8		5YR7/8	1～3mm程度の長石・黒雲母を含む
6	土師皿	16.7	7.8	3.6	口縁部～底部	3/4程度	良好	5YR7/8		5YR7/8	かなり細かい石英を含む(緻密)
7	須恵器甕	22.4復	不明	不明	口縁部～胴部一部	不明	良好	2.5Y7/1		2.5Y7/2	かなり細かい長石を含む(緻密)
8	高台付碗	15.3復	8.3	6.0	口縁部～底部	1/2程度	やや良	7.5YR8/6		7.5YR8/6	1～2mm程度の長石・赤チャート等を含む
9	須恵器甕	12.1復	不明	不明	口縁部～胴部一部	不明	良好	N6/0		7.5YR6/1	かなり細かい長石を含む(緻密)

※後は反転復元により求められた数値を示す。

Tab.2 出土瓦観察表

No.	器種	長さ	幅	保存部位	残存率	焼成	色調			胎土
							外	中	内	
1	軒丸瓦	不明	12.7	瓦当部のみ完形		良好	7.5Y6/1	10Y7/1	10Y7/1	1～7mm程度の長石・質岩を含む
2	軒丸瓦	不明	6.8復	外区外縁～内区中房	瓦当部2/5	やや良	2.5Y8/2	2.5Y8/2	2.5Y8/3	1～3mm程度の長石・黒雲母を含む
3	軒丸瓦	不明	7.7復	外区外縁～内区中房	瓦当部1/6	やや良	10YR8/4	2.5Y8/4	2.5Y8/4	1mm程度の長石を含む
4	軒丸瓦	不明	8.4復	外区外縁～内区中房	瓦当部3/8	良好	2.5Y7/2	2.5Y6/2	2.5Y7/1	1～2mm程度の長石・質岩を含む
5	軒丸瓦	不明	9.0復	外区外縁～内区中房	瓦当部2/5	良好	5Y6/1	7.5YR6/4	2.5Y6/2	1mm程度の長石を含む
6	軒平瓦	不明	7.0復	瓦当部～平瓦部(一部)	瓦当部1/3	良好	10Y6/1	7.5YR6/3	2.5Y7/1	1mm程度の長石・黒雲母を含む(平瓦部内側に隣れめを使用)
7	軒平瓦	不明	4.3復	瓦当部～平瓦部(一部)	瓦当部1/3	良好	2.5Y7/2	5Y8/1	2.5Y7/2	1mm程度の長石を少量含む(緻密)

※瓦の色調で外と内は使用時に向く方向で示す。

第4節 小 結

本年度の日向国分寺跡の調査は、平成11年6月1日から平成12年2月28日まで行った。

西都市教育委員会が、国庫補助を請けて行う日向国分寺跡の調査は、平成7年度から行われており本年度で第5次になる。昨年度までの調査で、平成7・8年度は主要伽藍を取り巻くと思われる溝状造構や金堂の堀込み地業跡（推定）、主要伽藍に取り付く西門跡などが確認され、昨年度は主要伽藍南東側の回廊跡が確認でき、最低でも3回の建て替えが行われていることが明らかになった。

本年度の調査の結果、日向国分寺の中門が回廊同様、最低3回の建て替えが行われていることが判明した。確認されたピットは、直径130cm程度の大きさで中門の規模がかなり大きかったことが確認できた。中門は2×3間で南北幅3.0～4.8m、東西幅7.8～9.0mであり、1尺30cmという規格をもとに建立されている。1・2期日の建て替えの柱壇形内には、瓦片が裏込めとして混入されたたり、柱穴痕が遺存している。但し、3期目に建て替えた中門は礎石建物であった可能性が高い。

主要伽藍の東西と南側を巡る溝状造構は、中門の前でとぎれ参道を形成している。また、溝の端部は推定東門の前面で深く広くなっていることから、水抜きを行った可能性も強い。これら溝状造構から出土した軒先瓦は、同一地点で出土した土器型式より9世紀前半段階以降のものと想定され、この時期頃に中門の第1期目の建立が行われたと思われる。この遺物は、回廊建立時の遺物と同時期であるが、以前までの調査で、これよりも前段階のものであろう遺物が出土している。このことから、金堂などの主要な建物が先に建立され、その後時期をおいて、中門や回廊などの建物が建立されたと思われる。

塔跡については、主要伽藍外の南東側の想定箇所について、初めて一部調査を行った。この箇所で基壇状に整地してある平坦面が確認でき、この箇所から北側に塔跡が確認される可能性が高くなった。また、地割り溝と思われるかなり深い溝も検出された。また、今回の調査では平成9年度確認できた主要伽藍西側に位置する西門に相対して、東門の想定箇所で回廊に沿って巡る溝状造構がとぎれており、この箇所が東門である可能性が高い。昨年度の調査で、西側の溝状造構が主要伽藍を一周するものではないと推定され、今回の調査で主要伽藍の途中で終焉していることも明らかになった。

日向国分寺の存続期間に関しては、741年から756年の間に建立され、およそ150～200年の間存続したと思われる。この期間の後半に日向国分寺は最も大規模なものとなることが今回の調査でも確認できたが、鎌倉時代にはかなり規模が縮小していることが延久8年に成る「延久園田帳」（史籍27冊）から読み取れる。実際、これ以降の造構等は確認されておらず、この後、一気に衰退に向かったのであろう。

今回の調査で中門に関しては3期目の建て替え時から礎石建物であり規模も拡大していることから、この時期が日向国分寺の存続期間の中で最も大規模かつ華やかであったであろうと考えられる。今回、中門跡が確認され、日向国分寺の中軸線が確定できたことは、今後、国分寺跡の全貌解明に大きな役割を果たす発見となった。

来年度以降は東門跡・塔跡の再度確認調査を行い、寺域南側に位置するであろう南大門やその他の建物について調査を行っていく予定である。

図 版

(PLATES)



1. トレンチ調査状況（第30地点）



2. トレンチ調査状況（第35地点）



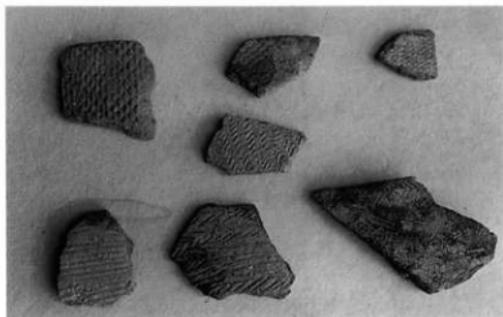
3. アカホヤ火山灰下層調査状況



4. 第11地点 遺構(集石遺構等)検出状況



5. 第10地点 集石遺構(6号)検出状況



6. 第10・11地点 出土土器(縄文土器)

7. 第14地点 出土土器(縄文土器)



8. 第14地点 古墳周溝検出状況



9. 第14地点 古墳周溝内出土遺物



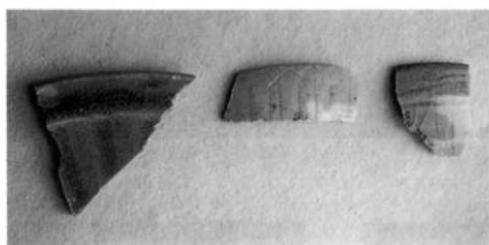
10. 第26地点 遺構(掘立柱建物跡等)検出状況



土 師 器



白 磁



青 磁



11. 第26地点 出土遺物(土師器・白磁・青磁・染付)



12. 日向国分寺跡A区遺構検出状況(北東より)



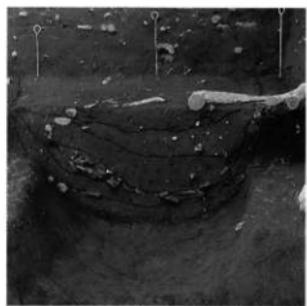
13. A区SE001遺物出土状況(東より)



14. A区SE001完掘状況(東より)



15. A区P1半裁状況(東より)



16. A区SE001土層断面状況(西より)



17. B区第1トレンチ遺構検出状況(東より)



18. B区第1トレンチ西側完掘状況(南より)



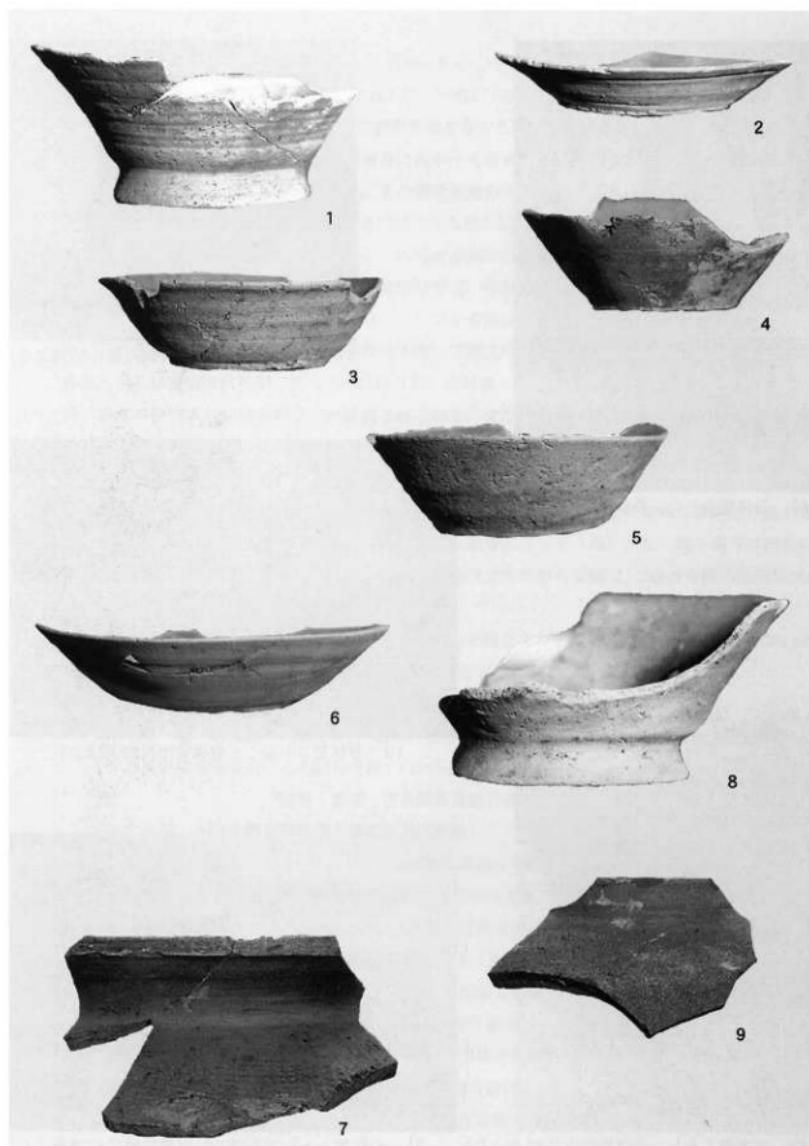
19. B区第3トレンチ遺構検出状況(東より)



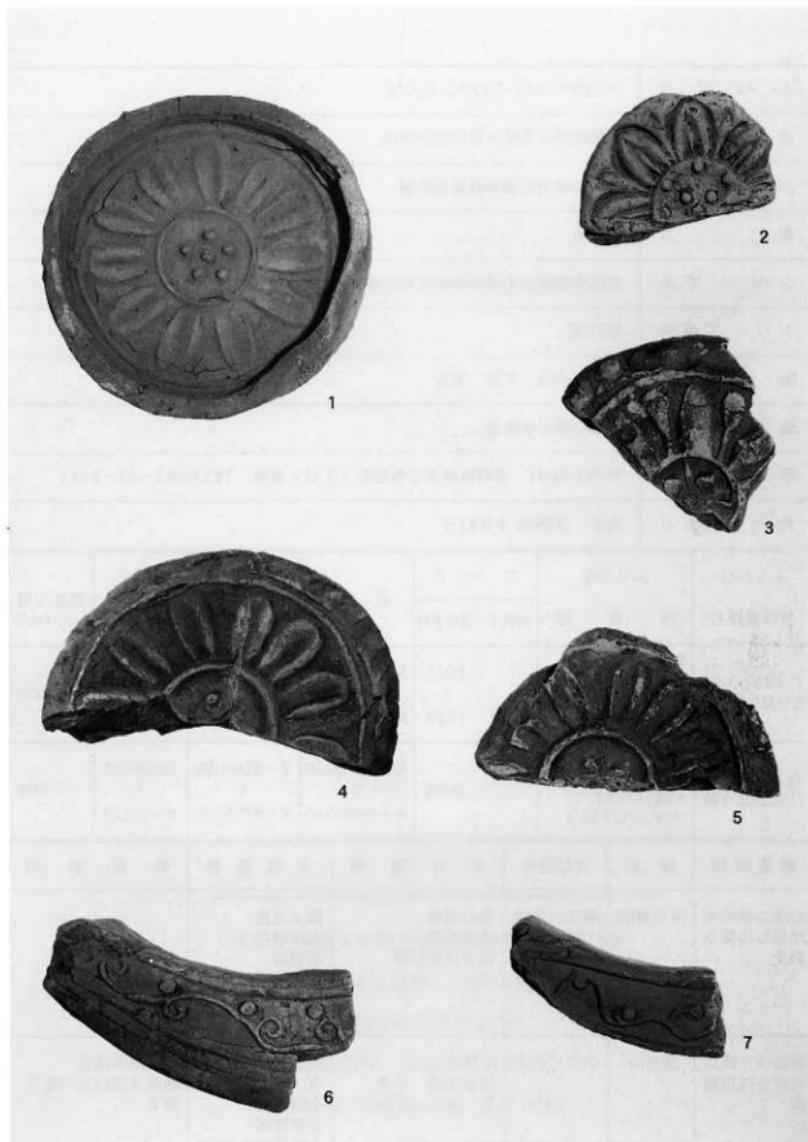
20. C区第1トレンチ遺構検出状況(南より)



21. C区第1トレンチSR001遺構検出状況(北東より)



22. 日向国分寺跡第5次出土土器



23. 日向国分寺跡第5次出土瓦

報告書抄録

ふりがな	さいとばるちくいせき・ひゅうがこくぶんじあと					
書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡					
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書					
卷次	第5集					
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第29集					
編著者名	義方 政幾・笠瀬 明宏					
編集機関	西都市教育委員会					
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL0983-43-1111					
発行年月日	西暦 2000年3月31日					

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村				
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやあさてばるわき 大字三宅字寺原脇他	1026 ↓ 1029	X=-99000.00 ↓ X=-97000.00	Y=36000.00 ↓ Y=36800.00	19990804 ↓ 19991224	125,000
ひゅうがこくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやあさてばるわき 大字三宅字国分	1008	X=-99750.00 ↓ X=-99950.00	Y=37600.00 ↓ Y=37750.00	19990601 ↓ 20000228	300
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
たばこ耕作天 地返しに伴う 調査	生活遺構	縄文～中世	集石遺構 古墳周溝 掘立柱建物跡	縄文土器 土師器 須恵器 青磁・白磁 陶磁器		
遺跡所在確認 に伴う確認調 査	国分寺	奈良～平安	中門跡 溝状遺構 瓦 溜 5条 1基	軒平瓦 丸・平瓦 土師器皿 土師器塊 土師器高台付塊	中門跡が確定 最低3回以上の建て 替え	

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第29集

西都原地区遺跡・日向国分寺跡

平成12年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印 刷 所 (有)ふくしげ印刷

